

道路寸断 女川の声

東日本大震災 衛星携帯つながらず

津波になぎ倒された家々のがれきが道路を寸断し、周囲との行き来を遮断された宮城県女川町おながわ。陸の孤島と化した海辺の町に12日入った。

携帯電話は「圏外」。電気も通っていない。女川町を外部とつなぐのは12日現在、役場が所有するバッテリーの尽きかけた衛星携帯電話1台だけだ。

非常時に備え、町は普通の携帯電話が使えないときでも通話可能な衛星携帯を数台そろえてあった。しかし、丘の上の役場庁舎をのみ込んだ大津波のために水没。たまたま庁舎外に持ち出していた1台が幸運にも残った。

地震直後から、町幹部らは衛星携帯を使って県との連絡を試みた。しかし、いくらかけてもつながらない。

陸路も寸断されている。北側に抜けるルートは堤防道路が決壊し、鉄橋も一部が落ちた。西隣の石巻市に抜ける国道398号も、約5キロにわたってがれきが路面を覆っている。

「本当に陸の孤島になってしまった」。鈴木浩徳・企画課長(50)は嘆く。町の状況が外部に伝わらないから、ラジオのニュースも「女川の情報はない」と言うばかりだ。

「何よりもまず、通信環境の整備と道路の確保。それだけは一番に助けて欲しい」

外部の救援が届かない中、町は生存者の安否確認を進めている。しかし、約1万人の町



津波で壊滅した宮城県女川町の中心部。13日午前9時7分、本社ヘリから、山本裕之撮影

民のうち12日正午までに生存確認できたのは3千人不足だった。

安住宣孝町長(65)が駆け寄ってきた。「食料もない。水もない。トイレや赤ん坊のオムツもない。しかもこの寒さ。みんなまだ興奮状態にあるが、気持ちが落ち着いてきたらいろんな物資の不足がストレスになって襲ってくる。とにかく助けがほしい。早く助けに来てくれ。そう伝えてください」。必死のまなざしでそう言った。